

DNA通信

《内容》731部隊、石井四郎とは何者か？ / 映画「医の倫理と戦争」を観て / コメ生産の企業化・ハイテク化は何をもたらすか？ / 2025 会計報告 / ほか

●映画上映とトークイベント（詳細は 11 頁をご覧ください）

- テーマ：ベトナム戦争の傷跡は今も続くーなぜ罪のない市民が苦しめられるのかー
- 映画上映：『失われた時の中で』坂田雅子監督と天笠啓祐さんの対談
- 日 時：2026 年 3 月 26 日（木）午後 13 時 30 分～
- 場 所：東京ボランティア市民活動センター会議室 AB
- 資料代：1000 円

●シンポジウムのご案内（詳細は 12 頁をご覧ください）

- テーマ：PFAS が脅かす食と暮らしー暮らしの隅々に入り込む危険な物質の正体ー
- 講 師：藤原寿和さん、天笠啓祐さん
- 日 時：2026 年 5 月 28 日（木）13 時 30 分～
- 場 所：東京ボランティア市民活動センター会議室 B
- 資料代：300 円

NO.170 2026 年 3 月 10 日発行



DNA 問題研究会

e-mail : d_monken@yahoo.co.jp

<https://dnamondaiken.wixsite.com/mysite-3>

〒191-0061 日野市大坂上3-21-18 洪方

郵便振替：00140-8-605520 年会費：3000 円

731部隊、石井四郎とは何者か？

2025年12月4日、飯田橋の市民ボランティアセンター会議室にて、シンポジウム「731部隊を改めて振り返る 石井四郎とは何者か？」を開催した。講師は、翻訳家・著述家の阿部海さん。『軍医・石井四郎——731部隊「謎の男」の知られざる真実』（ケネス・L・ポート著、花伝社刊、2025年2月刊）の翻訳者だ。参加者はオンラインを併せて40名を超える盛況だった。3時間におよぶ大変内容の濃い報告で、シンポジウムで語られた内容をすべて阿部海氏本人の文章で今号から数回に分けて掲載していく。



中国大陸の東北部（旧満州）、北をロシア国境と接している。黒竜江省哈爾濱（ハルビン）市



731 部隊本部棟（司令部機能、主要研究施設ほか）
軍は、証拠を秘匿するために、施設の大半を爆破したが、この本部棟など一部の建物は完全には破壊されずに残った。その後地元的生活再建や教育機関として利用されることになり、哈爾濱市第二十五中学校となった。

- 1978 鄧小平 第11期三中全会で改革開放（社会主義市場経済）のはじまり
- 1989年 天安門事件
- 1992年 南巡講話「中東に石油あり、中国にレアアースあり」
- 1997年 香港返還
- 2001年 WTO 加盟

当日は天笠さんの挨拶のあと、話の舞台である黒竜江省哈爾濱（ハルビン）市平房地区に点在する遺跡のいくつかを写真でレポートした。訪れたのは1997年8月半ばで、暮れには香港が返還されるという歴史的な年だった。その後2001年に中国はWTOに加盟し国際貿易の舞台で“世界の工場”としての地位を築く。2030年代後半には経済規模ではアメリカを抜く。一方の日本は長い不況に突入し、GDPでは2010年に中国に抜き去られ、インド、ドイツに次いだ5位にある（一人当たりでは30位）。（村上茂樹、会員）

◆シンポジウム資料◆

七三一部隊を改めて振り返る〜七三一部隊・石井四郎とは何者か？(1)

阿部海

かつて「満州第七三一部隊」という組織がありました。正式名称は「関東軍防疫給水部」です。この部隊は、満州事変が勃発した後、中国東北部、哈爾濱から南東二四キロの小さな村、平房に忽然と姿を現し、終戦と共に忽然と姿を消しました。現在、この部隊が、「防疫給水活動」に偽装した細菌兵器の研究、開発を行っていたことが知られています。とはいっても、いまだにその詳細は謎の霧に包まれたままです。戦後も既に八〇年が経過したというのに、今日に至ってなおこの部隊については不明な点だらけというのはどういうことでしょうか？

若い世代には七三一部隊について知らない方も多いでしょうし、一九八〇年代に森村誠一氏の「悪魔の飽食」を読み、七三一部隊の戦争犯罪に衝撃を受けた方々の意識からも、その印象が次第に薄れつつあるかもしれません。しかし、市民生活が厳しさを増すなか、防衛費が鰻上りに増額されていくという危機的な状況にある今日ほど、七三一部隊の興亡、その戦争犯罪について認識し、その認識によって自らの思考と行動を律する必要な時はありません。

●秘密細菌戦部隊の誕生

「七三二部隊」とは、一九四一年四月に、関東軍防疫給水部に割り当てられた通称号です。この部隊には、それまでにも「東郷部隊」

(一九三三〜三六年)、「石井部隊」(一九三七〜一九三九年)、「加茂部隊」(一九三九〜四〇年)など様々な名称が与えられましたが、その出発点は、一九三二年四月の陸軍軍医学校防疫研究室の開設に遡ります。

一九三一年九月一八日の関東軍による南満州鉄道爆破事件、いわゆる柳条湖事件を発端に、満州事変が勃発し、日本による中国東北部への侵略が開始されました。これによって、「満州事件費」という戦時特別予算が計上され、軍の年間予算が倍増しました。防疫研究室は、この臨時事件費を投じて陸軍軍医学校内に設けられました。まず、それは一九三二年四月(八月という記録もあります)に、陸軍軍医学校の建物の地下室の一部を改造して応急的に作られました。しかし、翌年の一九三三年秋、近衛騎兵隊から譲渡された隣接する土地に、工事費二〇万円を投じて鉄筋二階建ての独立した研究施設が新設されました。この時、石井四郎三等軍医正が研究室の主任に就任しています。七三一部隊は、満州事変のただ中で産声を上げた部隊です。この点は看過されてはならないと思います。と申しますのも、満州事変以前には、陸軍軍医学校は組織存亡の危機に瀕しており、そもそもこの「満州事件費」による予算上の裏付けがなければ、陸軍軍医学校内に防疫研究室が開設されることはなかったでしょうし、それがあの平房の巨大な複合施設へと拡張し、変貌を遂げることもなかったと思われるからです。七三一部隊は、日本の中国東北部への侵略によって肥えふとっていった組織だと言えます。

この研究室の当初の目的は、国防のための戦疫予防の研究でした。「防疫研究室は国軍防疫上作戦業務に関する研究機関として陸軍軍

医学校内に新設せられたるものなり」。「陸軍軍医学校五十年史」には、このように述べられています。しかし、表看板の裏側で、主幹を務めた石井四郎が目論んだことは、当時の日本ではまだよく知られていなかった細菌兵器の研究、開発でした。この時、「日本の化学戦計画の父」、小泉親彦や、「統制派」の中心人物だった永田鉄山など日本陸軍の大物らが、石井の細菌戦計画を力強く後押ししました。この石井四郎という軍医が、やがては平房に巨大な複合施設を有する秘密細菌戦部隊、七三一部隊を創設、自らその部隊長となる人物です。

●石井家

さて、ここからは石井四郎の出生についてお話していきましよう。

石井四郎は、一八九二年六月二五日に、千葉県山武郡千代田村大里加茂（現在の芝山町）に生まれました。彼の父親、石井桂は、繭の仲買で成功し、高利貸を営みました。桂は、借りの金を返せぬ村人から田畑を取り上げ、高利貸し地主に転じました。その資産を味噌、酒の醸造、生糸、繭の仲買等の事業に投じましたが、後に四郎が海外出張を行った頃に家運は傾き、石井家は没落したと伝えられています。屋号は「カネカ」でした。石井家は、加茂の村人らに対して一種の封建的な支配力を振るっていました。七三一部隊にとっては、この「加茂」という土地が非常に重要な意味を持つてくるのですが、それについては後ほどお話しさせていただきます。四郎の母親、千代は、上田藩（現在の長野県）の藩医の娘でしたが、こうした家系的な背景に、後に石井四郎が医学を志した土壌があっ

たのかもしれない。石井四郎について書かれた資料では、通常、四郎が四男で、彼の上に彪雄、剛男、三男と三人の兄がいたことになっていきます。しかし、近年の調査から、石井家には「進」という五男がいて、千葉県香取郡多古町の地主の家に婿養子に出され、苗字を変更していたことが分かっています。この家が男子の後継者に恵まれなかったため、進は徴兵から免れました。長男、彪雄は、四郎が一二歳だった一九〇四年に日露戦争で戦死しています。次男、剛男は後に平房（つまり七三一部隊ですが）の特別班班長に、三男はその監獄管理責任者に就任しています。また、夭折しましたが、石井四郎には二人の姉がおりました。

●香川県における「嗜眠性脳炎」の発生

さて、石井四郎の家族構成についてはこれくらいにして、彼の大

学時代へと進みましょう。

石井四郎は、金沢の第四高等学校を経て、一九一六年、京都帝国大学医学部に進学しました。京都帝大は日清戦争の賠償金を投じて設立された大学です。つまり、それは日本帝国主義の対外侵略のプロセスの中で発足した大学でした。彼は、この帝国主義と学問の癒着のど真ん中を歩んだ医学者だったと言えるでしょう。

石井は、一九二〇年三月に京都帝国大学医学部を卒業すると、翌二一年四月に近衛歩兵第三連隊の見習士官となり、軍事訓練を開始しました。同年八月には東京第一衛戍病院（現在の国立国際医療研究センター）に勤務します。その後、一九二四年に京都帝国大学大学院に派遣され、そこで細菌学、血清学、病理学、予防医学の研究を行いました。京都帝大時代の石井の恩師としては、清野謙次、戸

田正三、木村廉がおりますが、彼らは戦時中、内地にありながらも積極的に七三二部隊を支援しました。

一九二四年（大正一三年）、つまり石井が京都帝大に復学した年ですが、日本全国である奇病が流行し、その年の九月までに全国で三三〇〇名以上（正確には三三二〇名）が命を落とすという出来事がありました。なかでも香川県はこの疾病が猛威をふるった地域でした。しかし当時、この疾病の原因が何かということは分かっていませんでした。松山赤十字病院の院長だった酒井和太郎が、一九四二年八月二一日付の「海南新聞」にこの疾病の病状を描写していますので少し引用してみましょう。引用文は、愛媛県生涯学習センターのウェブサイトにあったものです。

「此病気に罹ると脳が非常に興奮してくる。そして総ての物体が二つに見え、その上瞼が下り、睡眠がしたくなる。食事もせず続けで眠り、これが本病の徴候だが、予防としては目下の所処置がない、原因は黴菌から伝染する」。

京都帝国大学では、この謎の疾病の正体を突きとめるために研究班が組織されましたが、石井四郎がこれに一役買っていたのです。当時の状況については、石井の恩師、清野謙次が少しだけ書き残していますので、清野謙次先生記念論文集第三輯（随筆・遺稿）（一九五六年）から引用させていただきます。

「大正十三年の夏を樺太旅行で送って帰って見ると、一滴の雨も降ら無かった内地の夏は非常に暑い。其内に新聞紙は奇妙な眠り病が各地に流行する由を伝えた、就中、香川県は最も激烈らしい。研究すると好いと思つたが、費用の見込みが付かぬから形勢を觀望して居つた。」

石井四郎君は快男児である。八月末に僕の所へ来て、斯かる不明の病気を研究せずに放置するのは、我が大学の恥であると言ふ。御尤もな次第だから、それなら一つ大学を動かして見る、必要なら助勢すると云つた。同君及同君に共鳴する若い連中は、奮起して教授を動かした。而して教授会は之を可決した」。

当時、石井は各教室の研究者らに呼びかけ、細菌学、病理学、内科学、小児科学の助教授四名を含む総勢一五名の研究班を組織しました。班長には、学部時代の自らの指導教官だった清野謙次を担ぎ出しました。石井は教授会に働きかけ、ついには京大研究班を香川県へと送り込むまでに至りました。このように様々な分野の研究者らが結集して一つの研究班を形成するというのは、当時としては斬新なことでした。京大班では、畑違いの研究者らが結集し、一つの目標に向かつて切磋琢磨しました。つまり競争したのです。

京大研究班が香川県に到着した頃、「ねむり病」は既に下火になっており、患者数も減少していました。そのため、京大班は患者の墓を掘り返して死体を引っ張り出すことも行っています。香川県での調査の成果は、当時の医学誌、「日新医学」の一九二五年四月号に八篇の論文として発表されました。この時のことを、戦後になって石井が回想している文章が残っていますので少し引用してみましょう。

「……細菌班とウイルス班に分けてまして、渡辺辺さんと共に、この、朝から晩までシャンペラン（シャンペラン型濾水機のことです）を渡しまして、遂に動物試験に成功して、東京に於ける学会に発表して、あらゆる反駁をそこに受けたんでありますが、とうとうまあウイルスであるということが承認されて……」

これは、一九五五年に恩師、清野謙次が心臓麻痺で急逝した後に行われた彼の通夜席で石井がした話の一節です。石井はここで、「ウイルスであるということが承認されました」と述べていますが、これは、一九二四年に香川県で流行した謎の「ねむり病」、つまり彼が「嗜眠性脳炎」と理解した疾病がウイルス性の疾病だったことを自分が特定した、ということを主張しているのです。しかし、ここで石井は、実に奇妙なことを述べています。アメリカの石井四郎研究者、ケネス・L・ポートの著作、「軍医・石井四郎」から、微生物学に関する部分を少し引用してみましよう。

「まず、戦後になって石井四郎が使用した日本語の『ウイルス』という語は、一九二四年にはなかった。ウイルスは、一八九八年にロシアとデンマークで、感染性病原体として発見されたばかりであった。一九二四年当時、科学者らは、ウイルスが細菌に類似した感染性病原体で、培地の中で別々に培養できるとまだ信じていた。一八九二年、後にタバコモザイクウイルスとして知られるようになるウイルスが、濾過機を通過させても感染力が維持されることが示された最初の病原体であった。一八九八年、オランダの微生物学者、マルティヌス・ウイレム・ベイエリンクは、濾過された液体培地に残る病原体が、微生物ではなく他の病原体だという結論を下した。彼の理論は、より高性能な顕微鏡が開発されるまで議論の余地あるものにとどまった。ほとんどの科学者らは、濾過後に残る病原体を別種の細菌と考えていた」。

ロシア人の微生物学者、ドミトリー・イワノフスキーが、タバコモザイク病の病原が細菌濾過器を通過させても感染性を失わないことを発見したのは一八九二年の話です。タバコモザイク病というの

は、後に知られるタバコモザイクウイルスによって引き起こされる植物の感染症で、タバコなどの葉にモザイク状の斑点を生じさせ葉の成長が阻害されます。イワノフスキーは、タバコモザイク病の病原が細菌よりも小さく、また陶製のシャンペラン濾過器を透過することを発見し、それに関して一八九二年に記事を書いて発表しました。しかし、彼は、この病原体が細菌だという考えを捨てきれなかった。この時点では、細菌とウイルスは原理的に区別して理解されていませんでした。分かっていたのは、それが当時知られていた細菌よりも微小で、光学顕微鏡では観察しきれない存在だということです。ほぼ同時期に、同じタバコモザイク病を研究した人物がもう一人います。先程名前があがった、オランダの微生物学者、植物学者、ベイエリンクです。当時、他の学者らは濾過プロセスの後に残るこの病原体を微小な細菌と考えましたが、ベイエリンクは、それが未知の溶液状の物体で、その溶液中の分子が感染し増殖すると考えました。ここで、彼によって、この未知の病原体が、はじめて細菌と原理的に区別して把握されたのです。しかし彼の主張は、一九三五年にアメリカの生化学者、ウエルデン・スタンリーが、タバコモザイクウイルスを結晶化させ、それによって電子顕微鏡でウイルスを可視化させるまで一仮説にとどまります。(つづきは次号で)

ドキュメンタリー映画「医の倫理と戦争」を観て

数十人のデモ隊が数人の警官に見守られ、銀座の街を歩く光景から映画は始まる。「さらば恋人よ」(ナチス・ドイツと闘ったイタリア・パルチザンの歌)を歌いながらの静かな行進だった。ウクライナやガザの戦争に反対するデモだが、それに出会った監督が医療・介護・福祉関係者の平和への祈りを紐解いていく。

この映画は「第1章 731部隊」「第2章 日本医師会の戦後」「第3章 医の倫理の現在」「第4章 戦争と医療者」と続く。現在、医療・福祉の崩壊はどんどん進んでいるが、戦時中に犯した歴史的事実をきちんと検証、反省していかないからではないかと問いかけている。

千葉県館山に海軍航空隊赤山地下壕跡がある。戦争末期に「格納庫」「応急医療室」「自力発電所」がこの中に造られた。今は一般公開されていて、私は3年前にここを訪れたが、網の目のように洞窟が続く中、五右衛門風呂や煮炊きのあとなども見られた。戦後、ガスも水道も電気もないこんな所に40年間暮らしていた人がいて、その痕跡だとのこと。謎めいていたこの人は亡くなる直前に731部隊にいたキノコの研究者だったということも明かしたそう。

1947年、ナチス・ドイツの非人道的な人体実験を阻止できなかったという反省をふまえて、世界医師会が再スタートする。その際、ドイツ医師会はニュルンベルク裁判の結果を踏襲し、医師にもきちんとその綱領や歴史を振り返る教育をするという決議をして加

盟を果たす。731部隊の人体実験を隠し続けてきた日本医師会は戦勝国アメリカの後押しもあり、その事実ほとんど触れずに再加盟を果たした。そして、関係者は大学に戻ったり、国立感染症研究所や製薬会社に入り出世していった。戦後ドイツでは人体実験を行なった幹部医師は絞首刑になったが、日本では3500人以上の隊員が誰も戦犯として裁かれなかった。その研究成果はアメリカの手に渡り、その後ベトナム戦争での枯れ葉作戦などで使われていく。

医療、福祉関係者のインタビューが続く。

日本赤十字看護大学名誉教授・川島みどりさんが聞いた、従軍した先輩看護師の話は重い。戦地では敵味方の別なく看護するという精神は踏みにじられるどころか、味方の重傷者には昇永水の注射を打って、生きたまま捕虜にしてはならないと見殺しにしたという。

初めに紹介したデモの主催者「安全保障に反対する医療・介護・福祉関係者の会」共同代表の伊藤真美さん(花の谷クリニック院長)の緑に囲まれた美しいクリニックが映し出される。ここで30年以上緩和医療を行なってきたが、患者さんに大きな変化があるという。ホスピスとしてではなく、まだ治療半ばで転院して来る患者さんが増えた。ここでもがん治療を始め、良くなっていくという。終末期医療費を削減するために、特に高齢者、障害者、認知症患者は打ち切られている。先日、知人が亡くなった。息子の養護学校時代の教員で、

性教育攻撃に対する裁判で共に闘った。83歳であった。昨年肺がんが発見され、まだ初期とのことだったが、治療はできないと言われていたという。透析もしていたので、本人も家族もそう思っていたとのことだったが、この映画を観た後ではやっぱりそうなのかな、と疑問も湧いてくる。「尊厳死の法制化」を訴える政党が出てくる中で、現実はどう進んでいるという事を知らされた。

同じ千葉県館山にある「かにた婦人の村」も紹介されている。ここを訪れると、余りの急な坂にびっくりする。この施設では入所者も職員も共に作業し、一緒に生活している。1958年に売春防止法が成立した時、元赤線で働いていた女性のコロニーが必要だと説いた牧師によって1965年に設立された。当時高校生だった私は、その呼びかけに応じて教会で献金活動をした。現在でも性搾取や暴力で傷ついた女性の入所を全国から受け入れ、長期滞在できる日本で唯一の保護施設である。丘の上には、ひとりの入所者の願いで建てられた従軍慰安婦の慰霊碑がある。城田すず子さんは日本で初めての従軍慰安婦本人の証言者となり、その後アジア各国の告発へとつながっていった。

この映画の中では「医学会には戦争中起きた事に関する反省がない、医学部教育の中に命を守る平和教育が大事だ」と発言している数少ない大学医学部での指導者が出てくる。戦後80年の年に公開されて、いまも再上映が続いている、ぜひ観て欲しいドキュメンタリーです。

(洪美珍、会員)

(現在、東京ではアップリンク吉祥寺で公開中)



コメ生産の企業化・ハイテク化は何をもたらすか？

◎この間のコメをめぐる動き

この間、コメをめぐる農家も消費者も翻弄されてきました。政府はこれまで農家に対して、コメを作るなどいい、家族経営の農家が生活できないようにしてきました。多くの農家が、農業の継続ができず、後継者がいなくなり、第一次産業を支える人達が少なくなり、多くの水田が失われてきました。その結果起きたのがコメ不足です。

スーパーからコメがなくなり、その後、徐々に出回っても店頭での価格が高騰していきました。しかし、この価格高騰で、農家の生活がよくなったわけではありません。消費者の農政に対する不信は増幅されたままです。政府の政策が招いた事態です。しかし、政府はその政策を基本的に変えようとしません。そのため今後このような事態は繰り返し起きることになるでしょう。

これまで政府がとってきた農業政策は、あくまでも農業の担い手を家族ではなく、大企業に置き換えようというものです。その大企業は、農地の大規模化と食料生産の方法に最新技術を導入して、従来の個人経営の農家をはるか昔から受け継いできた、自然の摂理にあった実に合理的だが、個人の技術や働きに負うところが大きい食料生産の方法とは異なる、大規模化と先端技術を応用した食料生産への転換を図つ

てきました。

政府はまた、食料の海外依存に関しても、方針を変えていません。新しい食料安全保障の基本は、ロシアなどを敵とし、米国や欧州、オーストラリアなどを味方とし、味方に依存する政策です。このことは米国内への依存をさらに強めています。今回もカリフォルニア産のカルロス米がスーパーなどに山積みされましたが、関税交渉の中で、自動車輸出のためにさらに農産物の輸入を拡大しようとしています。このように政府の政策に翻弄されてきているのが、私たちの主食です。

◎ゲノム編集稲の開発が進む

政府は食料生産で大企業依存とハイテク化を進めています。ハイテク化のひとつの柱が、農地を大規模化してロボットやドローンなどを駆使するAI化と、それに見合った種子の開発です。もうひとつの柱は植物工場であり、それに見合った種子の開発も活発です。大規模農地化では、稲を水田ではなく畑で育てる乾田直播が目指され、植物工場では、いまや「ビル産ビル消」と呼ばれる都会のビル内の植物工場で作った野菜を、ビル内のレストランで提供する仕組みまで登場しています。これはもはや第一次産業ではありません。

種子などの新品種の開発は、いまやバイオテクノロジーが主役になりましたが、ゲノム編集技術を用いた稲の開発が活発です。主にごどのような稲が開発されているかを見ていきましょう。まず農水省の研究機関であった農研機構が開発している、シンク能改変稲があります。シンク能とは、光合成に関する能力で、これをアップさせることで収量を増やそうというものです。農研機構では、もうひとつアレルギーや腎臓病の人を対象とした低グルテリン稲も開発しています。グルテリンは稲が持つ主要なたんぱく質であり、アレルギーの人や腎臓病の人向けに低たんぱく米として売り出すことが目的です。

島根大学が開発しているのが、健康食品用のおコメであり、かつ冠水や乾燥など環境悪化に抵抗がある稲です。同大学では当初、健康食品を目指して高GABA稲の開発を進めてきました。GABAというのは、血管や心臓に良いとされている物質で、それが高濃度で含まれたおコメの開発です。この稲はさらに乾燥や冠水などの環境ストレスに強い耐性を持つことが分かったとして、両者の性格を売り物に開発を進めています。

●遺伝子組み換えで医薬品用稲の開発

遺伝子組み換え技術を用いた医薬品用稲の開発も活発です。東大医科研と千葉大学が共同開発している稲にワクチン用・ムコライスがあります。この稲は、コメ粒の中にコレラ毒素を作らせるもので、導入する遺伝子はコレラ菌の毒素を作り出す遺伝子の一部です。このおコメを粉にして食塩液に溶かし飲みます。そうするとコレラに対する抵抗ができるということです。コレラ以外にも、大腸菌O157や赤痢菌毒素にも予防効果があるとされています。

遺伝子組み換え稲では、その他にも農研機構が中心になり、スギ花粉症稲の開発が進められています。この稲は、コメ粒の中に花粉症を引き起こすアレルゲンを作るようにしたものです。毎日ご飯を食べる際に、そのアレルゲンを摂取することで、スギの花粉に慣れていくという、減感作療法の考え方で開発されたものです。この稲の開発は一時ストップしていましたが、岸田政権（当時）が復活させ、今日に至っています。

このように新たに開発している稲は、健康に良い、環境の変化に耐性がある、医薬品になる、といったものが多いのです。ゲノム編集食品について、政府は規制をしませんでした。環境への影響評価も、食品としての安全性評価も、食品表示も必要ないとしたのです。安全性で疑問の大きなこの食品を、消費者に分からせないという方針です。その最大の理由が、将来の食料生産の主体を大企業化、ハイテク化に置いているからです。このように、いま政府が押し進めている農業政策は、日本の農業の担い手である農家のためではありません。

企業は採算が合わないと言います。以前、あるゼネコンが農業に進出しましたが、すぐに撤退しました。その際、農地にとって大切な土を売り払ったという話を聞きました。後には農業ができない土地だけが残ったそうです。企業は家族経営の農家とは違います。企業化は、第一次産業をいっそう衰退させ、コメの生産にダメージを与え、食の安全を奪うものだといえます。

（天笠啓祐、会員）

映画『失われた時の中で』上映とトークイベント

ベトナム戦争の傷跡は今も続く、なぜ罪のない市民が苦しめられるのか

ベトナム戦争は、南北に分断されたベトナムを巡り、社会主義の北ベトナム（ソ連・中国支援）や南のベトナム解放戦線（ベトコン）と反共の南ベトナム（アメリカ・韓国など支援）が対立し、冷戦下のアメリカが本格介入した1960年代～1975年の戦争で、米軍撤退とサイゴン陥落（統一）で終結しました。アメリカは「ドミノ理論」を背景に介入し、北爆を繰り返し、また枯葉剤使用などで地域住民を苦しめたのでした。森林を枯葉剤によって枯らすことによって敵の兵士を見つけやすくするためでした。

ベトナム戦争で使われた枯葉剤は、主にエージェント・オレンジ（オレンジ剤）と呼ばれ、強力な毒性を持つダイオキシン（TCDD）を多量に含んでおり、ベトナムの森林破壊と、多くの人々（兵士・民間人）にガン、先天性異常、神経障害などの深刻な健康被害を引き起こしました。ベトナム戦争中に米軍が散布した枯葉剤の影響とみられ、下半身がつながった状態で生まれた結合双生児の兄弟の（グエン・ベトさんとグエン・ドクさん）は知られていますが、米軍の兵士にも被害が及んでいます。

ドキュメンタリー映画監督の坂田雅子さんの夫で写真家のグレッグ・デイビスさんもベトナム戦争で枯葉剤の影響が疑われる病気で亡くなりました。夫の死後、坂田監督は枯葉剤被害をテーマにした映画製作を決意し、20年以上にわたり被害者の取材を続け、ドキュメンタリー映画を制作しています。小さな〈いのち〉が今なお苛まれています。ETV特集で『枯葉剤の傷痕を見つめて～ベトナム戦争終結から』が放映されましたが、50年以上も経っている今も戦争の傷跡が残されているのです。戦争は長くいつまでも市民を苦しめます。

そこで、「失われた時の中で」を上映した上で再びベトナムを訪れて取材されてきた実態を坂田雅子さんにお話いただき、エージェント・オレンジ（オレンジ剤）については科学ジャーナリストの天笠啓祐さんに話していただきます。是非とも沢山の方に参加していただけたら幸いです。

なお、事前に参加のご予定がお分かりの方はQRコードからお申込みください

＊

日 時：2026年3月26日（木）午後13時30分～16時30分 開場13時

テーマ：ベトナム戦争の傷跡は今も続く、なぜ罪のない市民が苦しめられるのか

映画上映：『失われた時の中で』（坂田雅子監督・撮影）

講演：ダイオキシン被害と世代を超える影響・天笠啓祐さん（科学ジャーナリスト）

司会：島蘭進さん（東京大学大学院人文社会系研究科名誉教授）

トークイベント：坂田雅子さん（監督）×天笠啓祐さん

チケット代：1000円（資料含む）

場 所：東京ボランティア市民活動センター会議室 A B

東京都新宿区神楽河岸1-1 飯田橋セントラルプラザ10階

JR総武線・東京メトロ副都心線 飯田橋駅下車すぐ 飯田橋駅西口を出て右。

問い合わせ：携帯番号090-2669-0413 神野玲子 E-mail jreikochan@yahoo.co.jp

主催：ゲノム問題検討会議 共催：DNA問題研究会



DNA 問題研究会シンポジウム

PFAS が脅かす食と暮らし

—暮らしの隅々に入り込む危険な物質の正体—

永遠の汚染物質といわれ、人体や生態系への悪影響が指摘されている PFAS（ピーファス）ですが、フッ素樹脂製造工場や産廃処理場、基地など様々なところを汚染源として、河川や地下水を汚染しています。しかし、汚染源はそれだけではありません。私たちの暮らしの中にも、フッ素樹脂のフライパンや、防水・防汚の衣類、食品包装、カーペット、化粧品、農薬などに含まれ、体内汚染をもたらしています。

また、半導体の製造時に PFAS が使われており、政府は、世界最大の半導体受託製造企業である TSMC 新工場を熊本県に誘致し、さらに国家戦略として世界最先端の半導体を開発・製造・販売するラピダスの北海道の工場を支援し、汚染を拡大させようとしています。

今回は、暮らしの隅々に入り込む危険な物質の正体を明らかにし、PFAS が脅かす食と暮らしを考えたいと思います。講師として、40 年あまり東京都職員として環境行政に携わり、全国で廃棄物問題などの環境問題に取り組み、いま半導体問題に取り組んでいる藤原寿和さんに、半導体製造と環境問題と人権問題を語っていただきます。天笠啓祐さんには暮らしの隅々にどこまで PFAS が入り込みどこまで危険な物質なのかをお話しいたします。

＊

日 時：2026 年 5 月 28 日（木）13 時 30 分～16 時 30 分 開場 13 時

テーマ：PFAS が脅かす食と暮らし—暮らしの隅々に入り込む危険な物質の正体—

場 所：東京ボランティア市民活動センター会議室 B

東京都新宿区神楽河岸 1-1 飯田橋セントラルプラザ 10 階

JR 総武線・東京メトロ副都心線 飯田橋駅下車すぐ 飯田橋駅西口を出たら右

講 師：藤原寿和さん

廃棄物処分場全国ネットワーク、止めよう！ダイオキシン汚染・東日本ネットワーク、有害化学物質削減ネットワーク、化学物質問題市民研究会、ダイオキシン・環境ホルモン対策国民会議、日台油症情報センター、千葉県放射性廃棄物問題を考える住民連絡会などで活動。

天笠啓祐さん DNA 問題研究会員 『フッ素の社会史』（地平社）の著者

参加費：300 円（現地参加費） 後日期間限定の逃がし発信あります。

ZOOM 参加無料（ただし質問や意見を述べることはできません）

ZOOM の方は事前申込み。下記必要事項明記の上 5 月 26 日までに

申込み時の必要事項は名前、職業、電話番号、メールアドレス

申込み先 E-mail：jreikochan@yahoo.co.jp またはこちら→

アドレスに返信確認メールお送りします。アドレスはお間違えないように

当日の詳細案内：ZOOM 参加申込みされた方には 5 月 26 日ごろに ZOOM の URL 等ご案内いたします。



問合せ：携帯番号 090-2669-0413（神野玲子） E-mail：jreikochan@yahoo.co.jp

主 催：DNA 問題研究会

会計報告

2025年の会計報告です。

・ 2025の会計報告

収 入		支 出	
2024年繰越	688,304-	通信費	46,044-
会費(32口×3,000円)	66,000-	印刷費	3,360-
定例会、シンポジウム参加費	13,800-	文具代	4,928-
カンパ	29,000-	講師交通費	30,000-
		定例会動画発信代	10,000-
		交通費	3,496-
		雑費	8,940-
合 計	797,104-	合 計	106,768-

※収入合計(¥797,104-)－支出合計(¥106,768)＝¥690,336-
¥690,336-は2026年の会計に繰り越させていただきました。

会員及び関係者の皆様。会費の納入及び、カンパをいつもありがとうございます。

昨年は私も定例会に参加する機会がなく、全て事務局を担っている洪さん、村上さん、神野さんにお任せし、立て替えてもらい、報告を受けて清算。自宅で会計処理をしています。

今年はせめて何回かは定例会に参加したいのですが、平日昼間開催となるとなかなか難しい状況です。

引き続き、定例会やシンポジウムなどを可能ならオンラインも活用しながら行なっていくので、ぜひご参加ください。
(報告 本田真智子)

3月1日に日比谷図書館であった「3・1ビキニ記念のつどい『ビキニ事件の時代を生きたふたりの対話』」に参加しました。主催は第五福竜丸平和協会で、日本原水爆被害者団体協議会(被団協)代表委員の田中熙巳さんと、歴史社会学者で恵泉女学園大名誉教授の内海愛子さんが講演と対話。

1954年に太平洋ビキニ環礁で米国が実施した水爆実験で被爆した漁船第五福竜丸。入院した久保山愛吉無線長の容体が新聞などで詳しく伝えられたため、多くの人たちが久保山さんに励ましの手紙を送りました。その中に、職場の東大生協の仲間と田中さんが送った色紙、学校の取り組みで内海さんが書いた手紙もあり、その縁から今回の企画になったそうです。

内海さんは、「当時は、戦場を経験した人が教師になっていたので、平和に対する意識が強かった」と、平和教育の取り組みが盛んに行われてきたと振り返り。また、被爆したのは日本人だけではなくたことや、第二次世界大戦での日本の加害も指摘しました。

田中さんは長崎での被爆体験、親戚も亡くしたこと。戦後、国から何の支援もなく食事もままならないほど困窮する中で、働き学んだことなどを話し、権力や政治のあり方などに対して深く考えなければと強調。

また、2月28日に米国とイスラエルがイランを攻撃したことから、司会や登壇者から「新しい戦争が始まった」との言葉が何度も聞かれ、核兵器が使われるのではないかという危機感を会場全体で共有しました。当日の様子は、第5福竜丸展示館のYou Tubeチャンネルで配信されています。ご関心のある方はご覧ください。
(会員 本田真智子)

会費納入のお願い

いつものお願いで恐縮いたします。

すこし余裕のある会員の皆様は、会費(年会費3000円)の納入をぜひよろしくお願ひします。

本通信の印刷発送やシンポジウムなどイベントの開催費用など活動資金とさせていただきます。

郵便振替用紙を同封します。また他の金融機関から送金いただく場合は、本頁下に詳細を記載しておりますので、ゆうちょ銀行の口座へおねがいします。

〈事務局から〉

▽本年もどうぞよろしくお願ひいたします。▽3月26日にゲノム問題検討会議との共催で映画上映と監督とのトークイベントを行います。詳細は11頁をご覧ください。オンラインはございませんのでご注意ください。また5月には、汚染広がるピーファスについて、藤原寿和さんをお招きしてシンポジウムを開きます。詳細は12頁をご覧ください。どちらのイベントにもふるってご参加ください。▽会計報告を本田さんにお願ひしました。物価があがっておりますが、会費は据え置きますので、よろしくお願ひします。

〈編集後記〉

▽2/8シヨックから高市鬱へ。いまなお高い人気を維持する高市人

気に、少数派を強く自覚する日々だ。そしていよいよ「国論を二分する課題」に彼らは手を着け始めた。まず殺傷用兵器輸出の解禁だ。このような重要課題を国会を経ずに「与党協議」と閣議決定で押し通す姿勢に寒気を覚えるが、今後4年は憂鬱なニュースに日々悩まされることになる。「独裁政権」下とはこういうものだと思ひ知る。▽日本に暮らす中国人界限でいま深く憂慮される事態が、4月21日靖国神社春の例大祭だ。もし首相が公式参拝強行となれば、中国政府の反応は、先の台湾有事発言を遥かにしのぐ激烈なものになり、韓国も加わる。今年「東京裁判開廷80周年」だ。中国はトップの靖国参拝を「戦後国際秩序への挑

戦」と受け止める。今度こそ大使召還もあるだろう。レアアースに加えて医薬品原料など日本経済社会に死活的な物資の貿易が止まる。音楽家たちの公演中止だけでなく、他の民間交流も止まる。一方、竹島の日々に大臣の参列がなかったと不満たまる右翼や高市岩盤支持層は欣喜雀躍で、彼らとあわせて中国を疎ましく思ひ日本人の厳しい視線に、百万の在日中国人が晒される。首相の振る舞いが東アジアに緊張を作り出し、それを「厳しい国際情勢」などと巧妙にすり替え、内向きに意気がる彼女の姿を国民が喝采でむかえ、軍備増強をと世論が沸騰する。ほとんどのマスコミはその流れに間違ひなく乗るだろう。

(む)

DNA 通信 170 号 2026 年 3 月 10 日 発行

カンパのお願い

当会では常時ご寄付をお受けしております。

今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

振替口座 名義:ディーエヌエーモンダイケンキュウカイ
口座番号:00140-8-605520

他機関から送金いただく場合

- 1 金融機関:ゆうちょ銀行
- 2 金融機関コード:9900
- 3 店番(支店コード):019
- 4 預金種目:当座
- 5 店名(支店名):〇一九(漢数字)
- 6 口座番号:0605520